

矢吹町史

第2卷

資料編 I

第一編

原始・古代

——考古資料——

1 原始・古代考古年表

西 暦	時代	主 要 遺 跡	要 項
	旧時 石器代	陣ヶ岡遺跡 (三城目)	阿武隈川を見下ろす、西岸丘陵上にある遺跡である。 昭和22年3月石材採掘中に発見された。成田型刃器と呼ばれている。
紀元前1万年	縄 文 時 代	下荒具C遺跡 (中畑) 松房池遺跡 (中畑) 赤沢山遺跡 (大和久) 越中山遺跡 (中畑) 向原遺跡 (松倉) 柏山遺跡 (中畑) 赤沢遺跡 (大和久)	泉川の南岸河岸段丘上にあり、やや北下りの平坦地である。並行沈線文・連続刺突文・貝殻腹縁文をもつ早期の土器・石器が発見されている。 松房池周辺にある遺跡で前期の土器が発見されている。 前期の土器・石器が発見されている。 泉川の南岸はん濫原を見下ろす台地上にある。昭和48年に発掘調査が行なわれたが、開墾の際遺構は破壊され土器・石器が発見されている。中期後半のものである。 中期の土器・石器が発見されている。 昭和37年に開田され、近くに毒清水と呼ばれる清水があり、縄文中期から後期にかけての遺跡である。
紀元前100年	弥 生 時 代	一本木遺跡 (中畑新田) 赤沢A遺跡 (大和久) 愛宕下遺跡 (中畑) カヤマ遺跡 (中畑) 大久保遺跡 (中畑)	稲作文化が東北南部に入り、石川町の鳥内遺跡に伝わった。 微高地から甕形土器が発見された。 中期の土器が出土した。 土器・石鏃が出土した。 中期の土器と石鏃・管玉が出土した。 弥生の住居址が土師の住居と切り合って発見され、土器・石器が発見された。

西 暦	時代	主 要 遺 跡	要 項
		赤 淵 遺 跡 (神田)	阿武隈川の西岸にあり、弥生土器が発見された。
紀元 400年	古 墳 時 代	塚 原 古 墳 (中野目)	弥生時代に発生した稲作文化は、矢吹地方にも豪族の誕生をうながし、阿武隈川沿岸に古墳文化が栄えた。 前方後円墳、本体は組合せ石棺である。
		谷 中 古 墳 (三城目)	阿武隈川の西岸に沿って南から1号・2号・3号と横穴式石室を有する古墳群で、1号は前方後円墳と考えられ、埴輪が発見されている。
		前 谷 中 遺 跡 (三城目)	谷中古墳群の西方 400mにある微高地で周辺は水田である。約1万㎡に及ぶ古墳時代の集落址である。
		鬼 穴 古 墳 (三城目)	阿武隈川の氾濫源を見下ろす丘陵上にあり、横穴式石室を持つ円墳で埴輪が発見された。
		鉢 内 遺 跡 (中畑)	泉川沿岸の遺跡で古墳時代の集落址があった。工事中住居址が発見された。
		甲 三 ツ 段 古 墳 (明新)	山上群集墳と考えられる。現在三基の円墳が認められている。
		弘 法 山 古 墳 (三城目)	神田から三城目へ通じる道路に接した群集墳で約三十基の古墳が認められる。
		清 水 塚 古 墳 (松倉)	群集墳であるが、現在は三基の古墳が認められる。
		塚 の 腰 古 墳 (三城目)	群集墳でかつては三十基以上あったと記録されている。直刀が出土した。
		下 荒 具 古 墳 (中畑)	中畑に入る旧道の山中にある。現在は二基が残っている。
		館 の 越 横 穴 墓 (中畑)	中畑観音山館の南面にあり、道路工事により発見、人骨・直刀が発見された。
		久 当 山 横 穴 墓 (三城目)	阿武隈川のはん濫原を見下ろす石山のがけ面に築かれた横穴墓群である。
		沼 和 久 横 穴 墓 (明新)	阿武隈川に近く丘陵の末端部水田に面して、数基の横穴の落ち込みが見られる。
		大 久 保 遺 跡 (中畑)	館の腰横穴墓の北部台地にある集落址で、一辺10mの竪穴住居を中心としている。

西 歴	時代	主 要 遺 跡	要 項
	奈良時代	行馬遺跡 (中畑)	前期の集落址で、角柱を用いた住居址が発見されている。
		かに沢遺跡 (中畑)	奈良前期の瓦窯址とその工人の住居址で、「寺」の寛書のある瓦から白河市借宿庵寺に使用されたものと考えられる。
		三峰森遺跡 (大和久)	隈戸川を見下ろす台地上の集落址である。
		森郭遺跡 (大和久)	台地上の集落址で周辺に堀址がみつめられ、水田となっている。一辺8mの竪穴住居を中心とした住居址の集落である。直刀が発見された。
		国神遺跡 (中畑)	森郭の南にある遺跡で土製の曲玉が発見された。使途不明の遺構と住居址が発見された。中世に館とした。
	平安時代	下荒具B遺跡 (中畑)	奈良前期の製鉄遺構があり、軍団兵士用の下げ砥が発見されている。奈良後期まで使用され、墨書土器「王」の銘を有するものをはじめ、多数発見された。
		後原遺跡 (三城目)	久当山横穴墓群の東北にひろがる集落址である。
		寺山遺跡 (松倉)	泉川沿岸の集落址である。製鉄遺構を中心とする遺跡で多くの墨書土器が発見された。
		太子堂遺跡 (中畑)	工事中に「壬」、「申」の墨書銘のある土師器が発見された。
		七軒遺跡 (松倉)	丘陵上に発達した集落址である。土師の竪穴住居群が発見され、鉄釘を使用している。
			このほかこの時代の遺跡は堰ノ上・井戸尻・狐石・笹目平・山王の各遺跡が大和久に、新地原遺跡が松倉に、芹沢・北田・上ノ原の各遺跡が柿之内に、古館・本城館・吉作の各遺跡が三城目に、岡の内・城代遺跡が神田に、屋敷耕地前・乙江沢遺跡が明新にある。

2 矢吹町遺跡地名表

- 遺跡名は今まで使用していた名称をあげた。
- 所在地は新字名による。
- 地目は変更があるかも知れない。
- 番号は矢吹地区内 100
中畑地区内 200
三神地区内 300
- 全国遺跡地図に登載されているものについては番号を付した。
- 図録番号は本資料編収載番号である。
- 細部の散布地などは割愛したものもある。
- 本地名表は昭和51年1月町史編纂専門委員会考古・古代部会で調製した。



弥生式土器 明新中（平林）出土 渡辺福松氏蔵

第1編 原始・古代—考古資料—

	遺 跡 名	所 在 地	地目	遺跡の 種 類	主な出土品	備 考	全国遺跡 地図番号	図録 番号
101	花 咲 山	矢吹字花咲	畑	散布地	縄文・弥生		30 380	
102	牛 蒡 作	〃 字新町	畑	住居址	縄 文	縄文土器・磨製石斧	30 387	
103	大 林	〃 字大林	宅地	散布地	弥 生	土師器を含む 宅地欠	30 388	
104	一 本 木	中畑新田字一本木	畑	散布地	弥 生	宅地欠		12
105	赤 沢 山	大和久字赤沢	山林	包含地	縄 文	縄文前期・後期 インターチェンジ工事欠	30 386	
106	赤 沢 A	〃 字赤沢	畑	散布地	弥 生		30 384	
107	赤 沢 B	〃 字赤沢	山林	散布地	土 師		30 385	
108	平 山	〃 字平山	畑	散布地	土 師	東北自動車道	30 376	
109	狐 石 A	〃 字狐石	畑	住居址	土 師	東北自動車道 墨書銘土師器 45.6.5調	30 377	78～ 80
110	堰 の 上	〃 字堰ノ上	畑	住居址	土 師	東北自動車道 須恵器を含む 45.5.7調	30 378	83～ 87
111	井 戸 尻	〃 字井戸尻	畑	住居址	土 師	東北自動車道 45.6.5調	30 379	81、 82
112	三 峰 森	〃 字三峰森	畑	住居址	土 師	東北自動車道 45.5.7調	30 381	88～ 92
113	笹 目 平	字笹目平	畑	散布地	土 師			
114	山 王	〃 字笹目平	畑	散布地	土 師			
115	西 後	〃 字西後	山林	古 墳	土 師		30 496	
116	北 田	柿ノ内字北田	畑	住居址	土 師		30 366	
117	芹 沢 A	〃 字田内	畑	包含地	土 師		30 493	
118	上 ノ 原	〃 字上ノ原	畑	散布地	土 師			
119	深 沢	大和久字深沢	畑	散布地	縄 文	縄文後期		
120	狐 石 B	〃 字狐石	畑	散布地	縄 文	縄文後期		
121	芹 沢 B	柿ノ内字田内	畑	包含地	縄 文	凹石・縄文		
201	乗 越	中畑字中畑 ⁵⁰⁸ 506	畑	散布地	土 師	縄文・須恵・石簇		
202	藤打山古墳	〃 字中畑	山林	古 墳		円墳		

	遺 跡 名	所 在 地	地目	遺跡の 種 類	主な出土品	備 考	全国遺跡 地図番号	図録 番号
203	狐 山	中畑字中畑南 ⁵⁴ ₅₅	畑	散布地	土 師	縄文・弥生		
204	狐山古墳群	〃 字中畑南 ³⁰ ₃₁	山林	古 墳		円墳		
205	渡 池 上	〃 字中畑南 ³⁰ ₃₁	畑	散布地	縄 文	磨製石斧・土師器(墨書銘) 土偶・石鏃		
206	寺 山	〃 字松房 ⁶⁸⁰ ₇₁₅	畑	散布地	土 師	土師Ⅶ(墨書銘) 製鉄石臼 ^{45.12調}		101～ 106
207	寺 山 古 墳	〃 字松房	山林	古 墳		円墳	38 29	
208	入 久 保	〃 字松房 ⁵⁷⁷ ₅₈₆ 587	畑	散布地	土 師			
209	太 子 堂	〃 字松房 ⁶¹⁹ ₆₂₉ 631	〃	散布地	土 師	土師Ⅷ・「壬」「申」墨書銘		121, 122
210	五 斗 蒔 1	〃 字松房 ^{148 102} _{149 101} 150	〃	散布地	弥 生	土師を含む		
211	〃 2	〃 字松房135	〃	散布地	土 師			
212	堤 内 池	〃 字松房 ⁵⁴² ₅₄₃ 544	〃	散布地	土 師			
213	登 喜 内	〃 字松房 ⁴⁷⁰ ₄₇₃	〃	散布地	土 師			
214	館 山 下	〃 字根宿 ⁶⁴¹ ₆₄₄	〃	散布地	土 師	須恵器を含む		
215	館ノ越古墳群	〃 字根宿771	山林	古 墳		横穴 直刀・人骨 ^{29.10.13発掘}	30 419	
216	やらい(行馬)	〃 字根宿 ⁴⁵² ₅₉₁	畑	住居址	土 師	46.3.20発掘		50～ 63
217	下 荒 具 A	〃 字中畑	畑	散布地	弥 生	土師を含む		
218	〃 B	〃 字根宿	畑	住居址	土 師	48.3.10発掘		42～45 107～ 120
219	〃 C	〃 字根宿	畑	散布地	縄 文	縄文・くぼみ石・石鏃 ^{48.3.10発掘}		5, 6
220	下荒具古墳	〃 字根宿	山林	古 墳		円墳		33
221	鉢 内	〃 字根宿 ⁵²⁵ ₅₃₇	畑	住居址	土 師	土師Ⅲ・須恵器を含む		46～ 49
222	地 極 山	〃 字中畑 ¹⁵² ₃₈₂	畑	散布地	土師・須恵			
223	北 原	〃 字根宿 ¹⁵² ₂₆₅	畑	散布地	土 師	須恵・磨製石斧		
224	北 原 経 塚	〃 字根宿	山林	経 塚		一字一石経		
225	錦	〃 字中畑 ⁵⁴⁹ ₇₄₄	畑	住居址	土 師	土師Ⅲ～Ⅴ		

第1編 原始・古代—考古資料—

	遺 跡 名	所 在 地	地目	遺跡の 種 類	主な出土品	備 考	全国遺跡 地図番号	図録 番号
226	森 郭	中畑字中畑 ^{777 790} " 字国神 ^{109 124}	畑	住居址	土 師	土師Ⅵ（墨書銘） 製鉄址・石臼 47.12.23発掘		93～ 100
227	国 神	" 字国神 ^{283 1 3013}	畑	散布地	土 師	住居址 祭祀址・土製曲玉 48.3		64～ 70
228	か に 沢	" 字国神 ⁴⁷²	畑	住居址 瓦窯址	工房跡 土 師	布目瓦・銅塊 48.3.1発掘	38 106	71～ 77
229	越 中 山 1	" 字国神	畑	集落址	縄 文	中期土器・石鏃皮はぎ		7
230	" 2	" 字国神	畑	散布地	土 師			
231	萱 山	" 字国神 ⁴⁴²	水田	散布地	弥 生	土師・須恵含む 南御山式石・管玉 開田		14、 15
232	谷 地 中	" 字国神 ⁸¹⁴	畑	住居址	縄 文	前期土器・土師 泉川改修		
233	林 崎	" 字国神 ^{417 420}	水田	散布地	土 師	縄文・須恵・石槍・石鏃 開田		
234	花 山	" 字鍋内 ^{51 1 61}	畑	散布地	土 師	須恵含む		
235	鍋 内	" 字鍋内 ^{190 122}	畑	散布地	土 師	須恵含む		
236	柳原古墳群	" 字鍋内 ^{34 149}	山林	古 墳		円墳		
237	寺 内	" 字寺内	畑	散布地	土 師			
238	寺 内 古 墳	" 字寺内	山林	古 墳		円墳		
239	愛 宕 下	" 字鍋内 ^{86 94}	畑	散布地	弥生・土師	縄文・石鏃		13
240	大 久 保	" 字大久保 ^{345 418 404}	畑	散布地	土 師	縄文・弥生含む		40、 41
241	牡 丹 池	" 字大久保・弥栄	畑	散布地	土 師	弥生・須恵含む		
242	陳 場	" 字一本木 ⁴⁴⁶		包含地	弥生・土師	縄文・須恵 36.改畑		
243	稲 荷 釜	" 稲荷釜	水田 畑	散布地	土 師	縄文・須恵 35.開田	30 399	
244	松 崎	" 松崎	畑	散布地	土 師	弥生・須恵・石鏃		
245	柏 山	" 柏山	水田	包含地	縄文・土師	弥生・打製石斧 開田	30 418	8～ 11
246	北 釜	" 字田町 ⁶⁹⁵	畑	包含地	弥生・土師	縄文・石鏃		
247	坂西古墳群	" 字坂西	山林	古 墳		円墳		
248	原 池	大畑字大橋	畑	散布地	土 師			

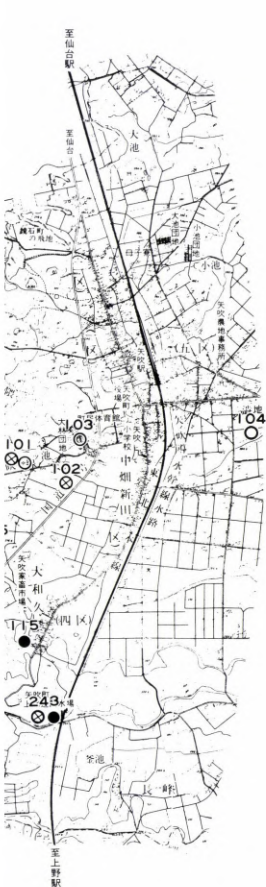
	遺 跡 名	所 在 地	地目	遺跡の 種 類	主な出土品	備 考	全国遺跡 地図番号	図録 番号
249	谷 地 向	大畑字大畑 ¹⁸⁸	畑	散布地	土 師			
250	深 町	〃 字住吉 ^{189 193}	畑	散布地	土 師			
251	戸 根 山	〃 字上ノ前 ^{316 158 164} 〃 字前久保	畑	散布地	土 師			
252	赤 羽 下	〃 字赤羽下	水田	散布地	土 師	36. 開田		
253	沢 尻	〃 字沢尻	畑	散布地	土 師			
254	大蔵山古墳群	〃 字前久保	山林	古 墳		円墳		
255	七 軒 1	松倉字松倉 ^{727 741}	畑	散布地	土 師	須恵含む		
256	上 原 山	〃 字松倉 ^{239 241 491}	畑	散布地	土 師			
257	新 池 原	〃 字松倉 ^{666 671}	水田 畑	散布地	土 師	37. 開田	38 27	
258	向 原	〃 字諏訪清水 ¹⁶⁰	畑	散布地	縄 文	弥生・土師	38 30	
259	阿 部 沢	〃 字諏訪清水 ²⁴⁴	畑	散布地	土 師	弥生・須恵		
260	宮 前	〃 字諏訪清水 ^{419 421}	畑	散布地	土 師			
261	諏訪清水山	〃 字諏訪清水 ^{419 420}	畑	散布地	土 師	須恵・石鏃		
262	北 向	〃 字諏訪清水 ³³³	畑	散布地	土 師			
263	向 井	〃 字上敷面	畑	散布地	土 師	弥生含む		
264	堀 ノ 内	〃 字上敷面	畑	散布地	土 師			
265	白 松 山	〃 字上敷面 ¹⁵⁰	畑	散布地	弥生・土師			
266	若 宮 山	〃 字上敷面 ^{13 18}	畑	散布地	土 師	須恵		
267	小 池 南	〃 字糺久保	畑	散布地	土 師			
268	申 久 保	〃 字清水塚 ^{368 377}	畑	散布地	土 師	須恵		
269	金屋古墳群	〃 字清水塚	山林	古 墳		円墳		
270	清水塚古墳群	〃 字清水塚 ^{251 270 271}	山林	古 墳		円墳	38 28	34
271	毒 清 水	〃 字清水塚	畑 水田	散布地	弥 生	土師	37. 開田	

第1編 原始・古代—考古資料—

	遺 跡 名	所 在 地	地目	遺跡の 種 類	主な出土品	備 考	全国遺跡 地図番号	図録 番号
272	七 軒 2	松倉字松倉742	畑 山林	住居址	土 師	鉄釘 51.工場跡致		

301	赤 淵	神田字神田東626	畑	散布地	弥生・土師			
302	城 代	〃 字神田南	畑	散布地	土 師			
303	岡 ノ 内	〃 字岡ノ内	畑	散布地	土 師	須恵器を含む	30 436	
304	前 谷 中	〃 字神田東	畑	住居址	土 師	石製模造品（鏡）		
305	鬼穴古墳群	〃 字神田東	宅地 山林	古 墳	土 師	埴輪・鉄鏃・刀子・聚玉 1号墳調査完了 44.7調 2号墳未了	30 435	22～ 27
306	谷中古墳群	〃 字神田東	畑	古 墳	土 師	鉄鏃・埴輪・金環 1号墳調査完了 44.7調 2・3号未了		16～ 21
307	小 又	須乗字小又	畑	包含地	縄 文		30 429	
308	陣 ケ 岡	三城目字陣ヶ岡	山林	散布地	旧石器	成田型刃器 鏡石町成田にまたがる	30 424	1～4
309	吉 作	〃 字吉作	畑	散布地	土 師			
310	後 原	〃 字谷中 ⁷² ₈₂	畑	集落群	土 師			
311	久当山古墳群	〃 字奉行塚	山林	古 墳	土 師	横穴	30 434	36, 37
312	塚の越古墳	〃 字塚の越	山林	古 墳	土 師		30 438	28, 29
313	弘法山古墳群	〃 字奉行塚	山林	古 墳	土 師		30 433	38, 39
314	塚 原 古 墳	中野目字塚原	山林	古 墳	土 師	前方後円墳・鏡・石棺	30 437	
315	沼和久古墳群	明新字沼和久	山林	古 墳	土 師	横穴式	30 441	35
316	甲三ツ段古墳	〃 字甲三ツ段	畑 宅地	古 墳	土 師	円墳	30 439	80～ 82
317	乙 江 沢	〃 字乙江沢	畑	散布地	土 師			
318	屋敷耕地前	〃 字屋敷前	畑	散布地	土 師			
319	西 原	〃 字西原	水田	散布地	縄 文	石器含む 開田	30 440	

3 矢吹町遺跡所在図



●——旧石器遺跡

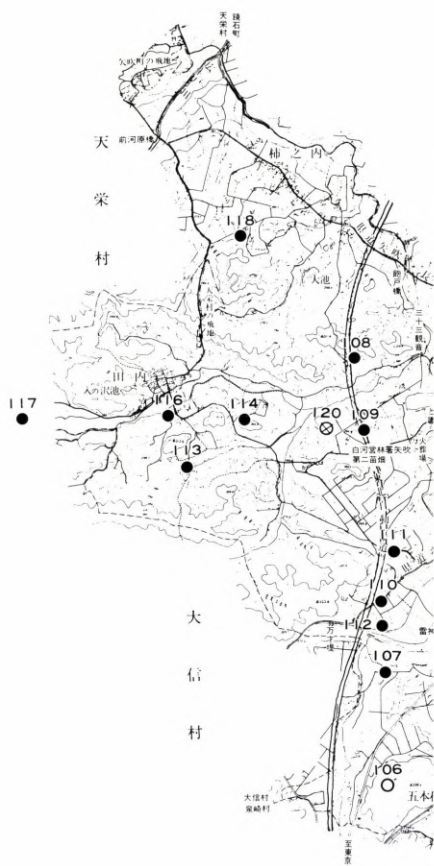
⊗——縄文遺跡

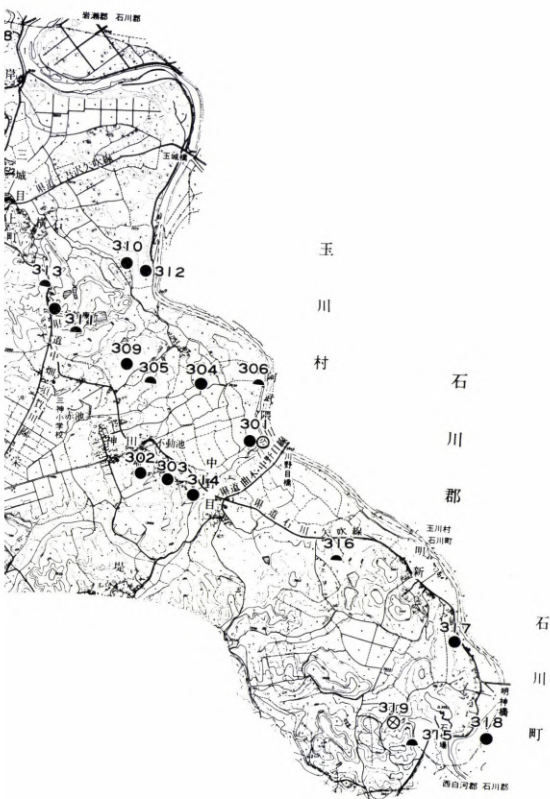
○——弥生遺跡

●——土師遺跡

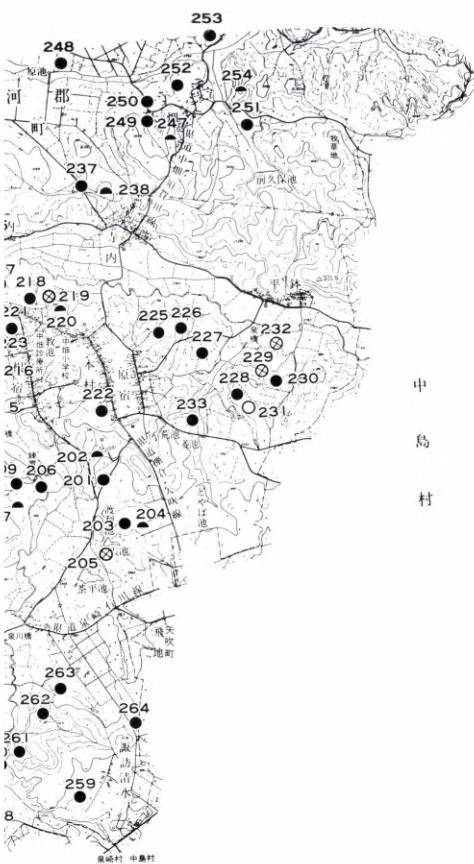
▲——古墳

(番号は所在表による)

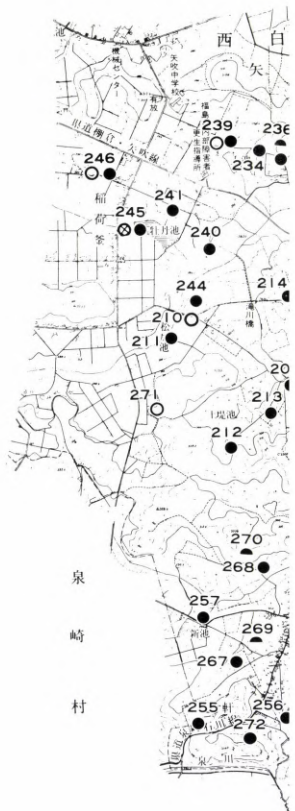








中
島
村



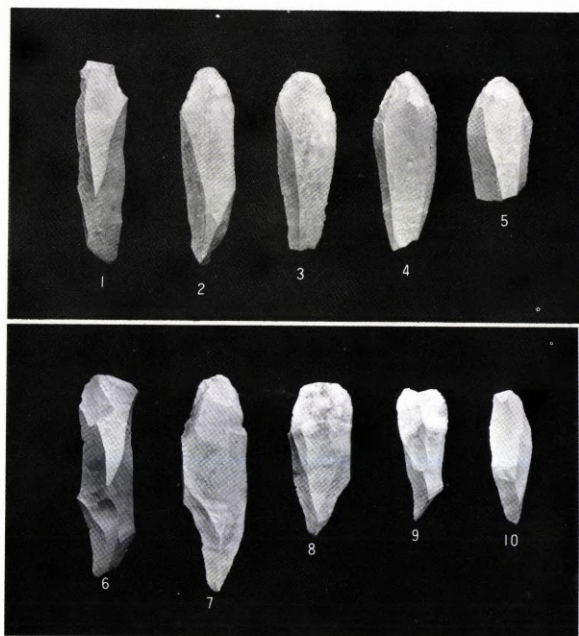
4 旧石器

陣ヶ岡遺跡

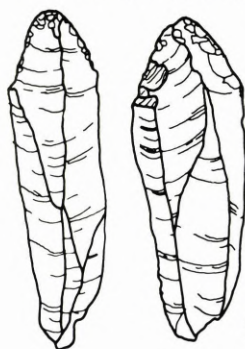
町三〇八
全国三〇・四二四



1 陣ヶ岡遺跡附近全景

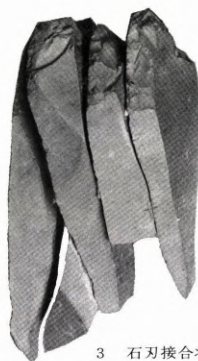


2 バックブレイド (ナイフ型石器) 長さ11.0cm



4 実測図

0 5cm



3 石刃接合状態

解説 陣ヶ岡遺跡

矢吹町大字三城目字陣ヶ岡と鏡石町大字成田字町屋口の石切場一帯に広がりを持つ遺跡である。成田形プレートの標準遺跡とされる、旧石器時代の遺跡と縄文時代中期、古墳時代の古墳群の複合遺跡である。

遺跡は阿武隈川が大きく湾曲する氾濫原に突出した丘陵地である。江戸時代から良質の石材の産地として採掘が続けられているため、南西部の阿武隈川に接した場所は、数十メートルの奥行で丘陵が削り取られている。むかしから土器や曲玉直刀などが発見され多くの遺物が残っている。

旧石器は、この採石場の表土剥ぎ作業中に発見されたものである。昭和二十二年三月二十二日阿武隈考古館長首藤保之助が所用のため、近くの水郡線泉郷駅に抜け、駅長との雑談中に、同村の石材業者が石器を発見したことが話題になった。首藤館長は早速、その石材店をたずね石器を調査し、打製皮剥(石匙)であることを、第二十五回採集記に記録している。この石器九点のうち六点を阿武隈考古館に寄贈した。首藤館長は同日午後石器出土地を調査し、出土地点を確認し、十数点の資料を発見したが完形品九点を採集し残りは残欠のため現地に残したと、前述採集記に記録している。このころ日本の考古学界は旧石器の存在を認めなかったが、この二年後、赤城山麓岩宿の切通しから相沢忠洋によって発見された瑪瑙製ポイント、日本の旧石器の研究に、大きな波紋を投げかけた。

成田形、ナイフ形石器はその後考古学者の注目するところとなり、鳥畑寿夫「福島県成田発見の石器について」、芹沢長介「先史時代(上)無土器文化」松沢亜生「石器研究におけるテクノロジーの方向」など次々学界に紹介され「成田形ナイフ形石器」と呼ばれるようになった。時期も岩宿遺跡の敲打器に続くものと考えられ、約三万年前のものと考えられている。

成田形ナイフ形石器は、剥離面が相互に接合するものが五点あり、これは石刃技法によるもので、第一の剥片から第五の剥片が作られるまで二〇回以上の打撃が加えられている。しかしその打撃のすべてから石刃が剥離されたわけではなく、背面などの調整の打撃も含まれる。材質は頁岩といわれる。

参考文献 須賀川市史(一)自然原始古代 福島県史(6)考古資料 目で見る矢吹町史

(1) 下荒具C遺跡
町二一九



5 土器片



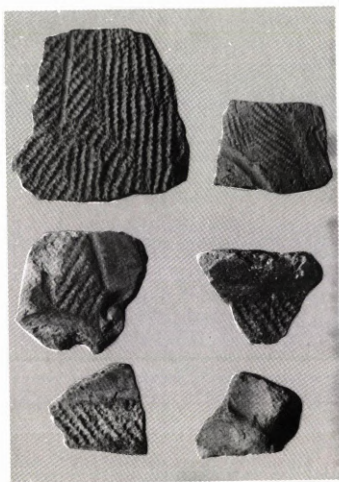
6 土器拓本

解説 下荒具C遺跡

矢吹町の東部を流れ阿武隈川にそそぐ泉川は、松倉、中宿の氾濫原として、豊かな土地をつくって来た。この沖積期が始まり、中畑の下荒具には（七千年前頃）人々が住みついた。この時代は土器類はあまり多く使用しなかったため、今日発掘調査を行なっても、完全な形で発見される土器は少なく、破片も同じである。したがって住居址などとはつきりしていない。

遺跡は下荒具北部で泉川の南岸に当り、ゆるやかな北下りの斜面である。昭和四十八年三月に実施された発掘調査によれば住居址などの遺構は不明であるが、第三層—黄色土混入褐色土—より縄文早期の土器が多く発見されている。調査したトレンチは北に傾斜しており、南側は浅く北側は深く、ここに堆積した

(2) 越中山—遺跡 町二一九



7 土器片

第三層の黄色土混入土は、近くにあった遺構が風化等により破壊され、包含層を形成したものと考えられる。

遺物は縄文早期の土器及び石器である。

土器は常世式を主体としており、厚さは五ミリメートル前後のもので薄手である。口縁上部から内側にかけて直行、あるいは波状に上下するものがみられる。口縁上部に小刻み目を持つている。これらは貝がらの腹縁、刺突と並行沈線、櫛歯状具による連続斜刺突、棒巻き撚紐の圧痕などで、これが単独または複合している。

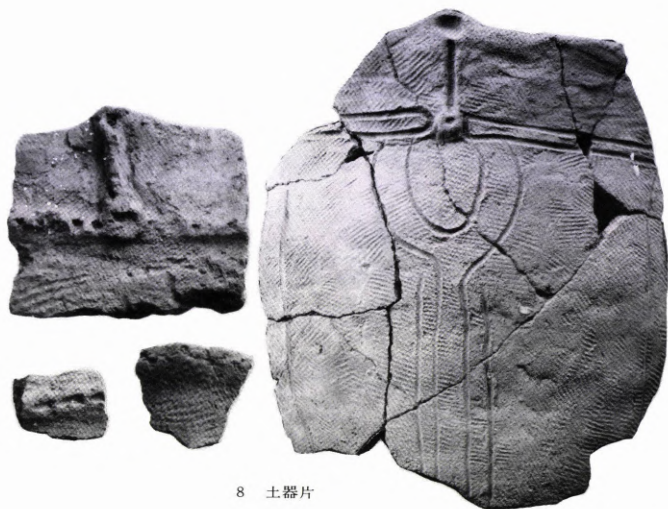
石器は石鏃、凹石などである。

これらは関東地方の田戸上層式土器との関連が考えられる。

解説 越中山遺跡

越中山は中畑の東部台地で泉川の氾濫原を見下ろす高所で、近くに清水があり、縄文中期後半の集落としての立地には良い条件をそなえている。中畑地区圃場整備に伴って、発掘調査が行なわれたが、戦後行なわれた開墾によって遺構は破壊されたものと考えられ、遺物は発見されるが遺構は検出されなかった。これについてはホイルトラクターの使用も大きな原因と考えられる。

土器は縄文中期後半の太木九式が多く発見されたが、完形品はなく、小破片のみである。

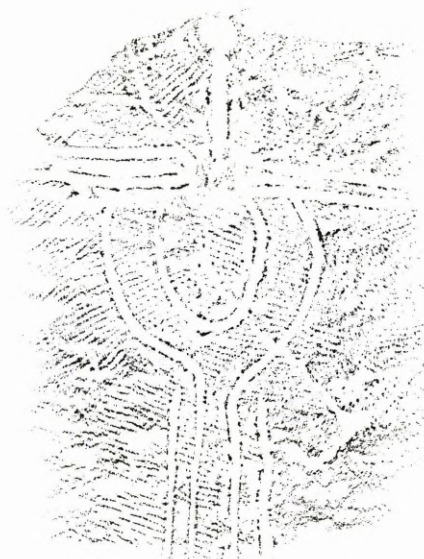


8 土器片



9 打製石斧

10 土器片拓本



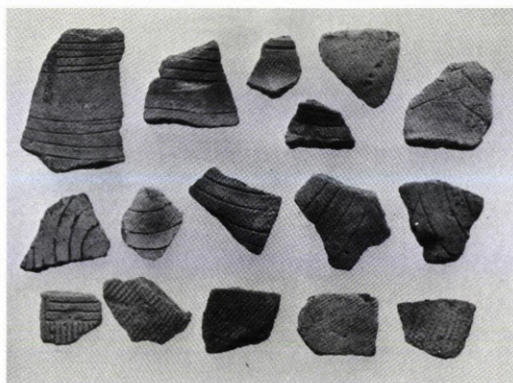
11 土器片拓本

(1) 一本木遺跡
町一〇四

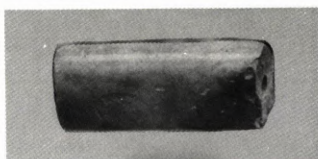


12 弥生式土器

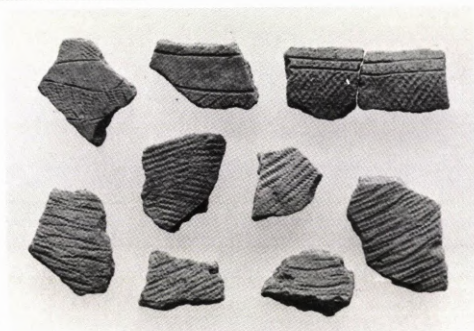
(2) 愛宕下遺跡
町三〇九



13 土器片



14 管 玉



15 土器片

解説 萱山遺跡

中畑地区「かに沢窯跡」の北側台地上に発見された弥生時代の遺跡である。中期の土器は以前から発見され、今回の圃場整備工事に伴う調査においても、土器は発見されたが、住居址等の遺構は発見されなかった。またさきに硬玉製の管玉が出土している。

〈弥生時代の矢吹〉県の中通り地区には弥生時代中期に稲作文化を伴って、弥生文化が入って来たことは明らかである。さきに石川町鳥内に発見された、鳥内遺跡は発見された土器から県の中通り地区最古のものとされている。神田地区の赤淵遺跡、中畑の萱山遺跡、矢吹の一本木遺跡、大和久の赤沢A遺跡、中畑の愛宕下遺跡など矢吹町には多く、弥生土器破片の散布地が古くから知られている。しかしこれらの遺跡は耕作中に偶然遺物が発見されたもののみで、正式に発掘調査が行なわれたものは無い。従って鳥内遺跡などとの関係については明らかにすることは不可能であるが、これら現在までに発見された矢吹町内の遺跡は弥生中期のものが多くいようである。これはこの地方は鳥内遺跡から三〜四キロメートルと近く、これらの遺跡もほとんどが阿武隈川沿岸または中畑地区の泉川に近いところである。

この時代の生活の基盤は縄文時代の自然物の採集にかわって、稲作を中心とした農耕技術の発達による経済によったものと考えられる。まず小さな川の谷口の低湿地帯を開拓して水田をつくり、耕作を行なったようである。これには石鍬、石庖丁などが使われたが、木鍬、まぐわ、えぶり、田下駄、田舟、木臼などが使われていたようである。

(1) 谷中古墳群

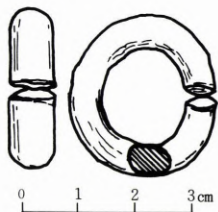
町三〇四
町指定史跡



16 谷中全景



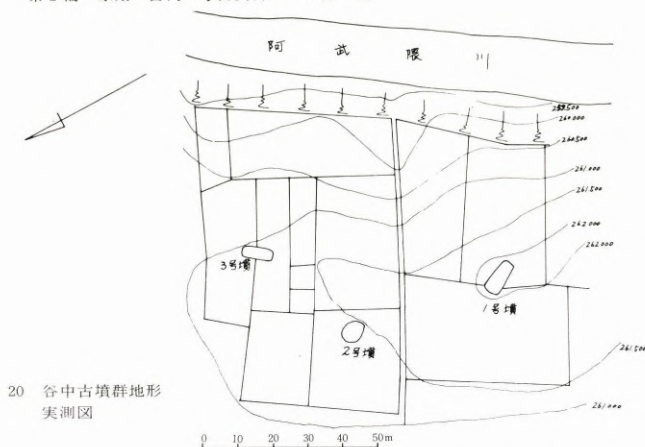
17 谷中1号墳



19 金環実測図



18 金環



20 谷中古墳群地形
実測図

解説 谷中古墳

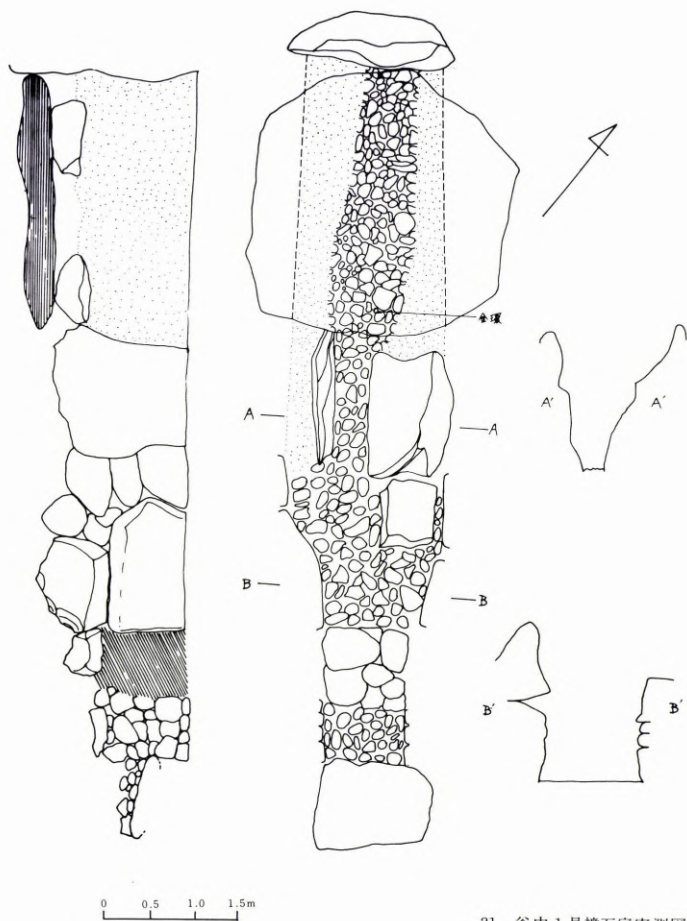
この古墳群は阿武隈川の西岸にあり、この地域では川床が低くなっている。現在三基の古墳があることが確認されており、いずれも横穴式石室を有している。南から北へ一号、二号、三号と名づけられている。一号墳は昭和四十四年七月鈴木啓の担当で調査された。奥壁は花崗岩の一枚岩を立て中軸線で九・三メートルで、玄室は六・三メートル幅一・八メートルである。石材は花崗岩が多く玄室の閉塞には凝灰岩が使用された。玄室内からは鉄、金環が発見され床には小円礫と粘土を使用して張られていた。この一号墳は古くから埴輪が発見される古墳として注目されていたもので、これまで大正十年頃武人埴輪が発掘され、付近一帯に破片が多く散布している。昭和五十年十一月に行なわれた周埴の予備調査によって、幅五メートル、径五〇メートルに及ぶ円墳であることが明らかにされた。この調査の際周埴内から多くの円筒埴輪の破片が発掘されている。

二号墳は一号墳の北四〇メートルにあり、一号よりやや、小形の石室を有する。この石室も横穴式石室である。

三号墳は二号墳より北へ三五メートル離れて露出した石室がある。これも他の古墳と同じく横穴式石室を有する。

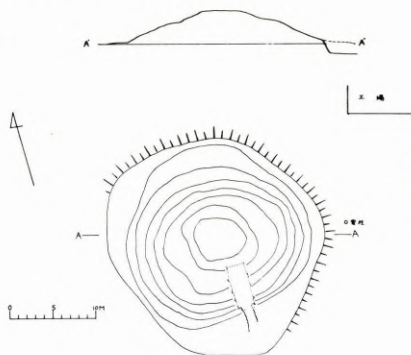
この三基の古墳に一樣にみられることは、みな墳丘が欠損していることである。この辺一帯は阿武隈川の氾濫原で、明治以降明治二十一年、同三十五年、昭和十六年と大洪水に見舞われているため、古墳が築かれてから千数百年の間の洪水は数えることも出来ない回数であったと考えられる。墳丘は度重なる洪水で流されてしまい、今日のように石室のみが露出してしまったことが考えられる。

この古墳の主は、はたして何者なのだろうか、古墳時代この辺は白川国に属し白川国造の支配にあったことは明らかであるが、国造に関係のあった豪族のものであろうか、永遠の謎である。



21 谷中1号墳石室実測図

22 鬼穴1号墳墳丘実測図

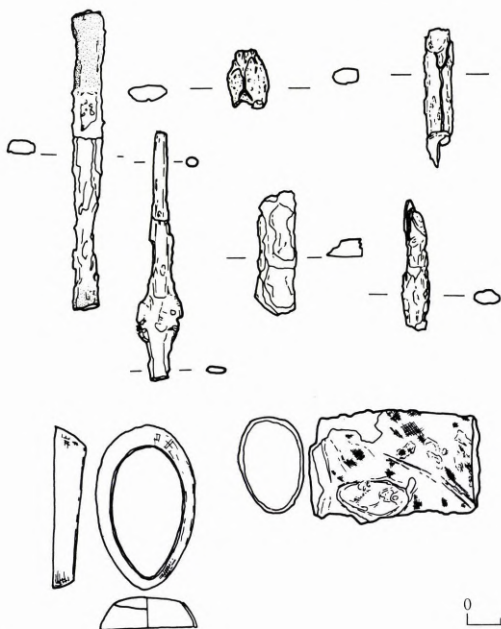


(2) 鬼穴古墳群

町二〇五
全国三〇・四三五

県指定史跡

23 出土遺物実測図





24 鬼穴1号墳墳丘

北側



25 鬼穴1号墳墳丘

南側



26 鬼穴1号墳 (左)玄関 (右)玄室

第1編 原始・古代—考古資料— 7 古 墳

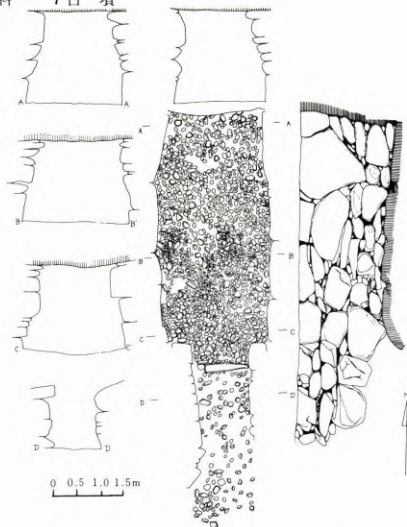
解説

鬼穴古墳群

鬼穴古墳は谷中古墳群の南方六五〇メートルにあり、丁度この中間に古墳時代の集落と考えられる前谷中遺跡がある。この遺跡は石製模造品を出土した一辺一〇メートルに及ぶ大形の竪穴住居址が確認されており、この両古墳群との関係が考えられる。

一号墳は阿武隈川の氾濫原を見下す丘陵上にあり、この西側に二号墳がある。

このうち一号墳については昭和四十四年谷中一号墳と同時期



に矢吹町教育委員会によって発掘調査が行なわれた。

主軸方位は南北を示している。墳丘は裾部が同地に進出した工場の整地の際五メートル程削られた。完形の円筒埴輪をはじめ、多くの形象埴輪も発見されたといわれている。墳丘は現況で二七メートルの径をもち、高さ四・一メートルである。周辺は耕作及びその後の整地などで削られているため、径三〇メートル以上の円墳と考えられる。

玄室は両裾を有し胴張り状の平面をもち、両壁は花崗岩を主とする河石による持ち送り積みである。奥壁は一枚石を立てており高さ一・九五メートル、幅一・九三メートル、奥壁から玄室仕切石まで五・三四メートル、現存の羨道三・五メートルで全長八・八四メートルである。床は粘土張りに円礫を敷きつめである。玄室床面は当時の地表面とみられる。

遺物—内部はすでに盗掘をうけており、遺物の発見状況も二次移動によってうごいた状態で発見されている。

鉄鏃(有茎式柳葉で十数点、刀子一点、鉄製鞘尻(先端に銅輪をはめている)注目すべきものとして、深紅色琥珀製玉の発見である。これは県内には郡山市田村町正直古墳にその例を見るのみである。

鬼穴古墳は谷中古墳などと同時期のものと考えられるもので阿武隈川沿岸に多い大形の横穴式石室を持つ須賀川地方、福島などとともに矢吹町の阿武隈川沿岸の古墳時代文化は、最も華やかな時代をむかえたのであった。古墳時代は国造支配の時代でまだ中央との関係はあまりなく、地方が最も富み栄えた時代であったようである。

(注)一九七一、矢吹町文化財調査報告書「谷中古墳」

(3) 塚の越古墳群

町三一二
全国三〇・四三八



28 全景



29 直刀 (塚の越出土)

(4) 甲三ツ段古墳群

町三一六
全国三〇・四三九



30 全景
1号墳



32 全景 3号墳



31 全景 2号墳

(5) 下荒具古墳群

町三〇
町指定史跡



33 全 景

(6) 清水塚古墳群

町 270
全国 38・28

34 全 景



(7) 沼和久古墳群

町 315
全国 30・441

35 全 景

(8) 久当山古墳群

町三一
全国三〇・四三四



36 全 景



37 横 穴

(9) 弘法山古墳群

町 313
全国 30・432



39 奉行塚地内

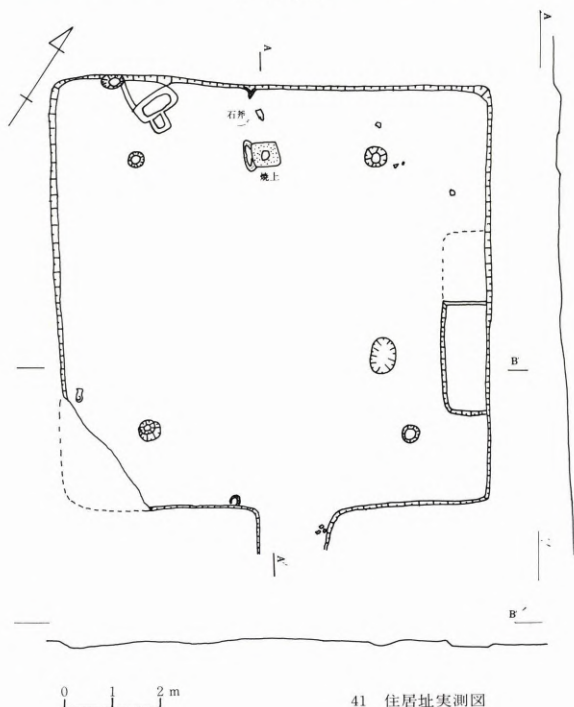


38 弘法山地内



40 住居址

(10) 大久保遺跡
町二四〇





41-2 甕(こしき)出土状況

【解説】大久保遺跡

中畑地区にあり観音山城の北方水田をへだてた台地にある遺跡である。中世の館跡であったと伝えられ、現地にはこの時代の板碑が二基あり稲荷様の祠がある。

遺跡はこの台地一帯に広がりを持っており、開墾工事を行なった際土器が発掘されたので、矢吹町教育委員会により昭和五十一年二月から三月にかけて調査が実施された。この遺構は大久保地区一帯に広がる土師式竪穴住居群の中心にあり、古墳時代中期後半の南小泉式に平行する時代のもと考えられる。

今回調査された住居址は東西、南北ともに九メートルと大形である。南側に入口を持ち四本柱の竪穴住居である。北側に炉址と考えられる焼土があり、南小泉式の土師器が多く出土している。遺構全体から弥生式の土器の破片及び打製石器が発見されているところから、精査により東壁に弥生式土器を伴う一辺三メートルの竪穴住居が切合って発見された。この弥生式の竪穴住居については後日に調査を行なうこととし今回は見送った。

遺構の北西部に約一メートルの方形ピットがあるが炉に近いところから、これは貯蔵穴と考えられよう。四本の柱穴は径三〇センチメートルで、深さが五〇センチメートルである。遺構全体として後世の攪乱があり、保存はあまり良くない。この遺跡の南方約二キロメートルにある観音山城には横穴墓が数基あるところから、この遺跡の居住者との関係が考えることができよう。

なお遺物のうちに相当量の鉄滓が北東部から発見されたことは、この竪穴住居内に鍛冶遺構があったことも考えられる。

(11) 下
荒具
B—
遺跡
町二
八



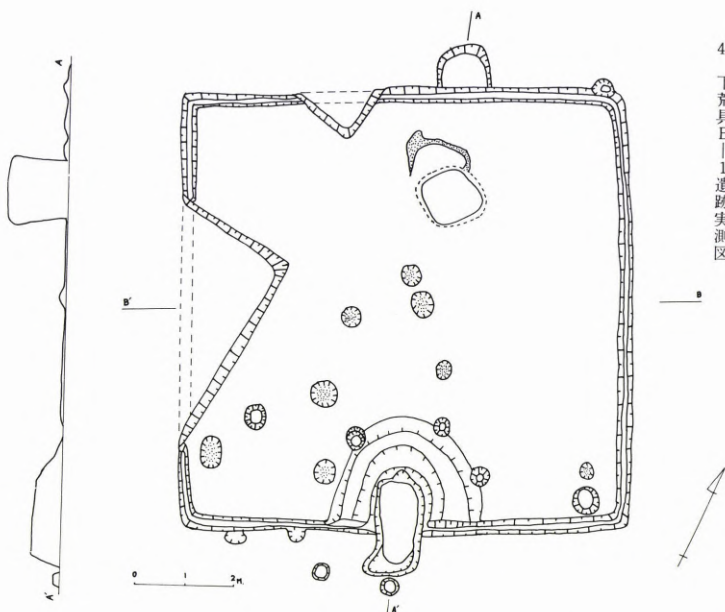
42 土 器



43
住
居
址



44
提
砥



解説 下荒具B-1遺跡

中畑地区を流れる泉川の北岸に広がる丘陵地帯である。現況は畑であるが、中畑地区圃場整備に伴って工事が施行されるため、事前に発掘調査が昭和四十八年二月から三月にかけて行なわれた。

本遺跡は鉢内、下荒具A（開田により破壊）遺跡と接続するものでこの辺一帯に及ぶ大遺跡であることが考えられる。

今回の調査によって明らかにされた遺構は住居址三基、製鉄遺構一基である。これらの遺構のうち製鉄遺構がもっとも古く、住居址三基は時代がさがるものである。

製鉄遺構

九メートル四方の竪穴遺構を持ち、全体に粘土を堅くたたきしめて床を造成したものである。鉄滓などが多く発見されているところから考えて、製鉄に関係があることが明らかである。中央部を中心として七基あり、筒形炉から発達した形のものと考えられるもので、径四〇センチメートル前後である。

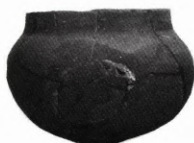
竪穴の北部に径一メートルのフラスコ状ピットがありこの中から提砥が発見されている。

遺物は前述の提砥及び土師器が発見された。

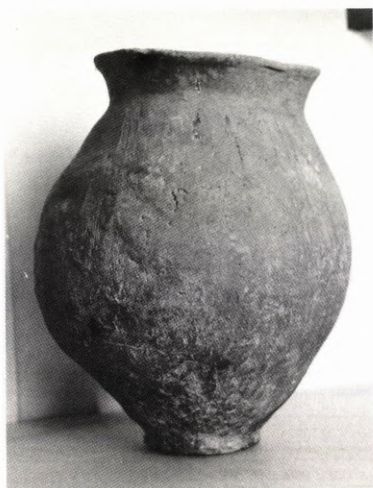
土器は朱彩を行なわれたものが多く栗圃期のものと考えられる。



47 土 器



48 土 器



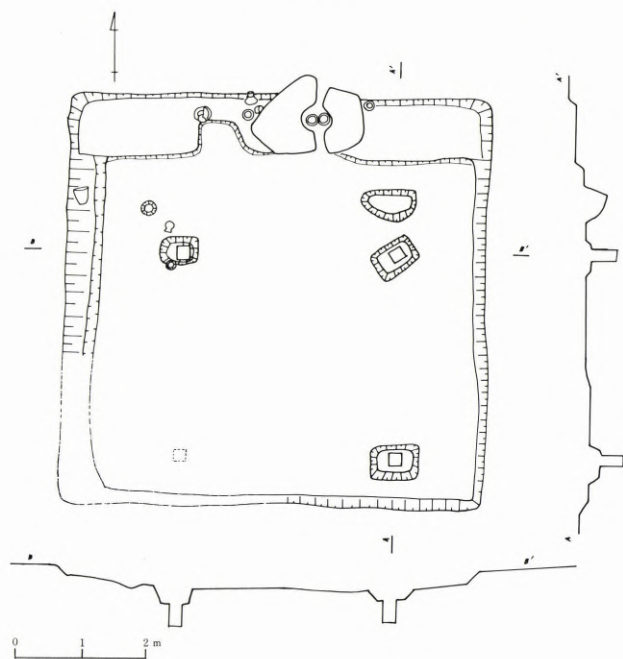
46 土 器



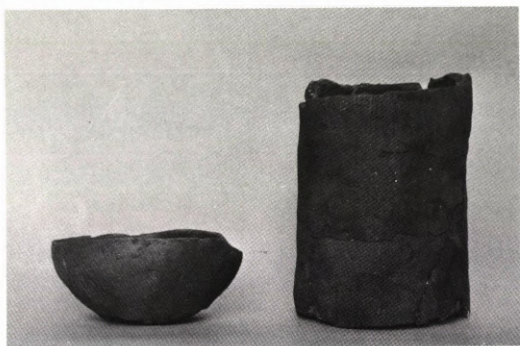
49 砥 石



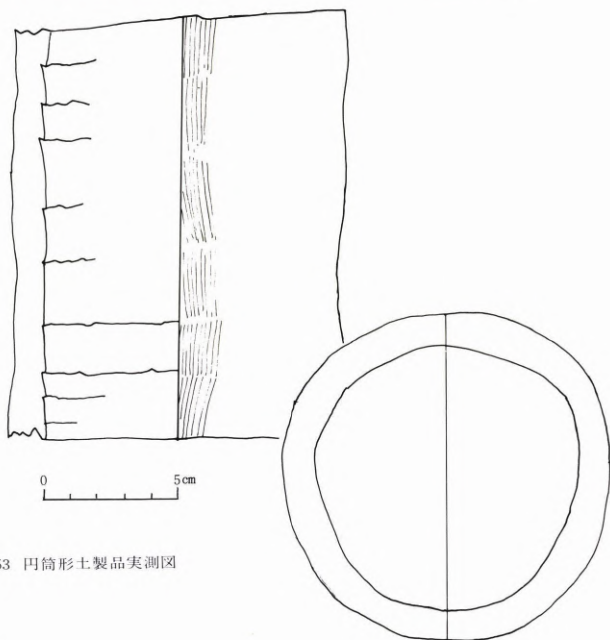
50 1号住居址



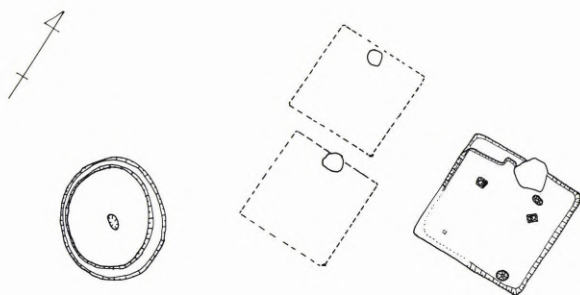
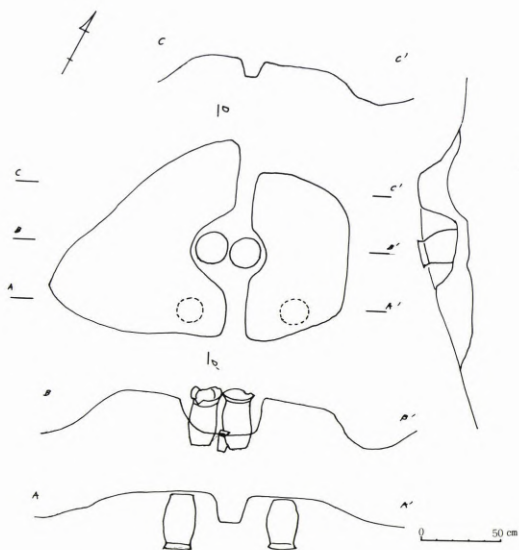
51 1号住居址实测图



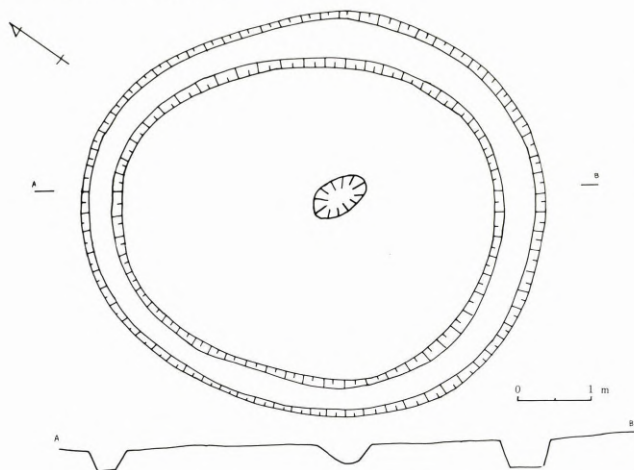
52
土
器



53 円筒形土製品実測図



55 行馬遺跡配置実測図

行馬遺跡
だ円形遺構実測図

解説 行馬遺跡

中畑地区の根宿にある遺跡で昭和四十六年に矢吹地区県営圃場整備事業にともなう第一回目の発掘調査として実施されたものである。泉川を見下す台地上に広がる遺跡で南に観音山城をひかえている。早くから耕作中に土器が発見されて話題にのぼっていた遺跡である。今回調査された遺構は住居址と円形遺構である。時期は土師器から栗圀式に平行することが明らかであり、七世紀と考えられよう。

住居址は六・五メートルの辺をもつ方形で北と西側は幅五〇センチメートルの段を有し、溝を持って床に続いている。南と東の壁は二五センチメートルあり急に落ち込み床になっている。柱は四本ありそれぞれ掘形をもち、二〇センチメートルの角柱と考えられる。かまどは北壁に築かれ煙道は壁の外にのびていたと考えられるが明らかではない。内部は袋状にふくらみ中に煮沸用の埋めが二基固定されており、かまどの火床はガラス状に焼け固まっている。焚口は長がめが二つ逆に立てられ、これを芯にして粘土をぬり込めて構築されたものである。遺物は土師器が主で「かまど」周辺の段上に多く発見された。

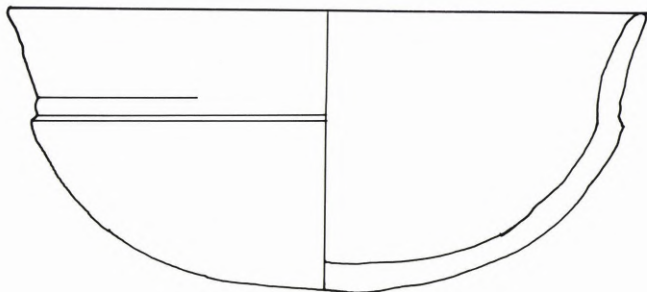
このほかに、さきに土器が発見された遺跡があるがこれも竪穴住居と考えられる。

楕円形遺構は住居址の西方一五メートル、泉川を見下す崖上であり、高杯などが出土している。これは南北六・五メートル、東西五・五メートルの楕円形で幅六・五センチメートル、深さ四〇センチメートルの濠を廻らしている。祭礼的な行事を行なった場所とも考えられる。行馬遺跡は「やらい」と読ませるがその意味は明らかでない。

この住居址の角柱についてはあまり類例が無いものであるが、同じ栗圀期の住居址で安達郡大玉村間尺遺跡（破橋とも呼ぶ）の住居址にこの例が報告されている。



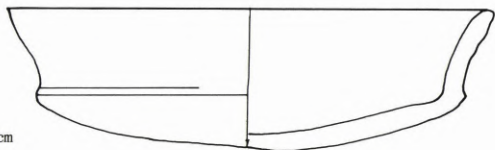
57 土器



58 碗実測図



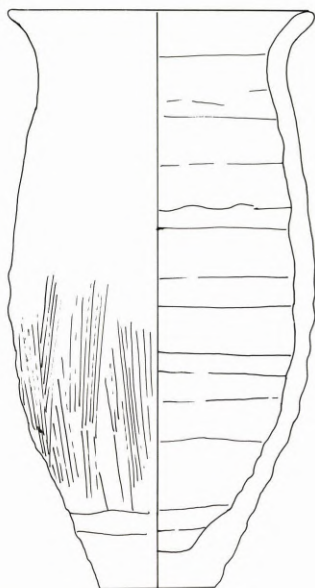
59 杯実測図



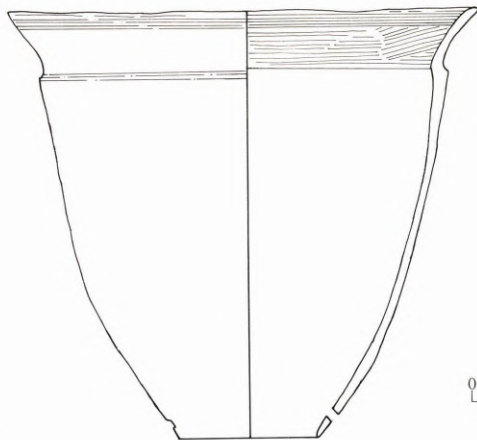
60 碗実測図

0 5cm

61 壺実測図



62 同底部拓本

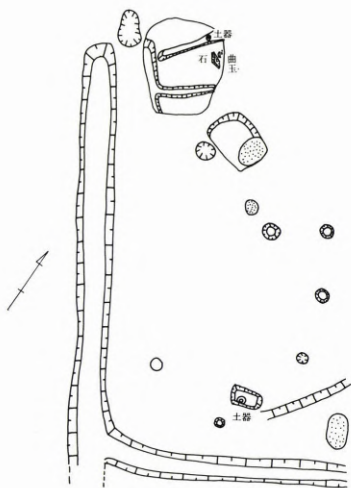


63
瓦実測図

0 5 cm



64 国神遺跡 2 号住居
(作業場) 址

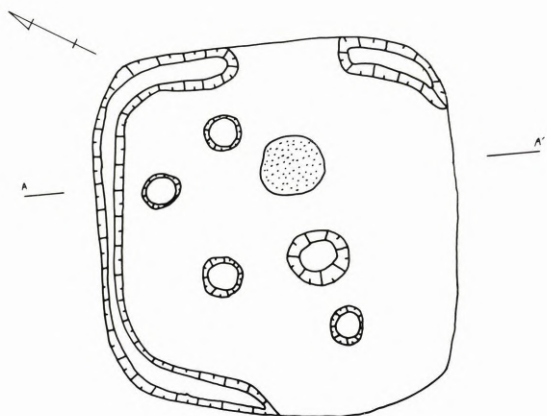


65 2 号住居址実測図



66

国神遺跡 1号住居址



67 1号住居址
実測図

0 1 2 m



69 土製勾玉出土状況



68 祭祀に使用したと思われる土器



70 土製勾玉

解説 国神遺跡

矢吹地区県営圃場整備事業に伴う調査として、昭和四十八年十月から十一月にかけて実施された。

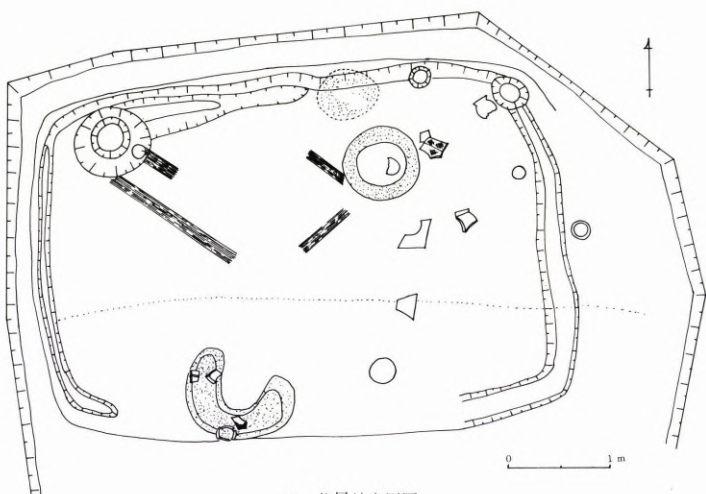
この辺一帯は国神館と呼ばれ、中畠氏によって築城された中世の館跡と伝えられている。遺跡はこの築城が行なわれた際、その大部分が破壊されたものと考えられたが、土器の散布する北及び東斜面について調査を実施した。

まず住居址であるが上部については館の構築の際削られており、かろうじて平面プランを確認することができた。約三メートルの方形で炉址、柱穴などあまり明らかでない。時期については土器等の遺物がなく明らかではないが隣接する森郭遺跡と同時期と考えられる。

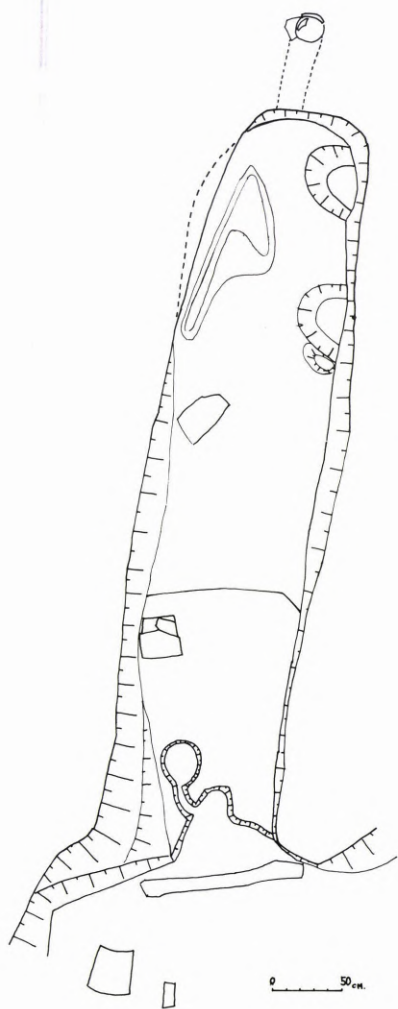
東斜面には幅一メートルから五〇センチメートル、幅四〇センチメートルの溝で周辺を廻らした遺構が発見されたが、使途不明である。所々に小ビットがあり、焼土とともに土器が発見されている。それも特殊なもので、土製曲玉、小形杯など住居址からは発見されないものが多い。祭祀とか何かの作業所とも考えられる。この近くには内屋敷と呼ばれる地名があり、周辺が水田になっていて、館跡とも考えられる場所であった。この国神の館跡については別に筆をとることしたい。



71 住居址



72 住居址実測図

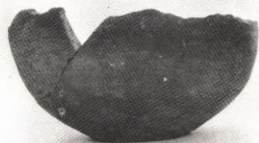


73 瓦窯址

74 瓦窯址実測図



75 瓦だめ



76 土器

77 「寺」のへら書きのある
布目瓦



解説 かに沢窯址

この遺跡は中畑の東に発達した丘陵に位置し、かに沢池から国神館址の東堀に通ずる沢に発見された窯址である。さきに開畑が行なわれ桑園を造成したとき、布目瓦が発見され一時話題になったが、その後特に調査は進められなかった。昭和四十八年三月中畑地区圃場整備事業に伴って発掘調査が行なわれた。この遺跡は窯址、住居址、瓦溜からなり、瓦窯址に伴なう工人の住居址が発見されている。

窯址 焚口から窯尻まで五・五メートル、窯幅は一・三メートルである。煙出しは一・五メートルの長さを持ち、径は二〇センチメートルである。勾配は二三度である。構造は地下式で天井部は陥没しており現存部は平均七〇センチメートルである。壁は粘土に苧を混入した壁土でぬりあげている。

住居址 この住居址は窯の南方約六メートルの場所にある北斜面を削平し、東向きに構築した竪穴住居である。構造は西側を掘り東部底地を埋め立て造成している。東西五メートル、南北三・五メートルのプランを持ち周辺は排水用の溝を廻らしている。床面には平瓦を敷いており、窯との関係を考えさせるものがある。柱穴からたおれた形で柱様の炭化物が検出されていることから火災家屋とも考えられる。カマドは東壁に築かれているが、煙道などの遺構は明らかにされないか

った。ここで注目されることはプランの西北寄りに製銅用の炉が発見されたことである。直径七〇センチメートルの焼土と埴埴が発見され、これに伴なう銅塊が住居址内から数点発見された。

瓦溜 住居址より南に位置した丘の陵線に近い場所である。約五平方メートルの広さに堆積されていたが、製品の置場と考えられる。今回発見された瓦はほとんど破片のみで完形品は発見されなかった。さきに桑園の造成の際発見されたのはこの瓦溜が破壊されたものと考えられる。

遺物

瓦は四枚合わせの布目瓦で平瓦及丸瓦である。軒丸瓦はロクロ引きによる重弧文と「寺」のヘラ書きのある平瓦で、これらの瓦は白鳳時代のものと考えられるもので、これと同時期の寺院址は今のところ明らかなのは白河市の借宿庵寺であるところから、本遺跡発見の瓦は借宿庵寺に使用されたものと考えられる。

土師器 土師器は杯、甕などである。杯は栗罎式で七世紀末葉から八世紀初めのものと考えられる。

埴埴 製銅に用いられたもので破片ではあるが、円形炉とともに発見されたもので銅塊も数点発見されている。



79 炭化した壁面



78 2・3号住居址



80 砥石出土状況

(16) 狐石遺跡

町一〇九
全国三〇・三七七

解説 狐石遺跡

東北自動車道工事による調査のため昭和四十五年六月実施された。矢吹字狐石地区にあり、隈戸川西岸の東面した斜面に発見された遺跡である。

四基の住居址であるが一号、四号はそれぞれ一基、二・三号は切合って発見された。時期は平安前期と考えられるもので一号は一辺七メートルの竪穴住居で火災にあっていることが明らかであった。須恵器、釘、砥石のほか耳皿である。耳皿は破片であるが灰釉らしきものがあり胎土は良い、高台をもつ。

二号住居は南北五・六メートル、東西三・七メートルの隅丸方形の竪穴住居で東壁に幅一メートルの「カマド」があり煙道は一メートルの長さがあり長襖がこの北壁に置かれていた。「カマド」の前には〇・三×〇・八、深さ〇・三メートルのビツトがあり木炭片などが出土した。

三号住居は二号住居の北西床面を一六センチメートル掘り込んで築かれた四・八×四・四メートルの隅丸方形プランを持つ竪穴住居である。幅五、深さ五センチメートルの周溝が壁際を廻っている。「カマド」は北壁に築かれ焚口の両側は立石を芯としている。中央部にも立石があった。柱穴はなく周溝に柱状のビツトが発見された。

四号住居—この住居は小形で一辺三メートルの隅丸方形である。周溝は壁ぎわに廻らし、北壁に「カマド」が築かれている。柱穴は床面になく、壁面数ヶ所不規則に検出された。

遺物—土師器—いずれも内黒処理が行なわれ、体部下半はロクロ回転による篋削りによる整理がほどこされ底部は篋おこし整理がみられるものである。

これらには墨書のものがあり「家」のほか三点ほど発見されている。須恵器、鉄釘、砥石などが発見されている。

平安時代の集落址と考えられるものである。



81 遺跡全景



82 1・2号住居址

解説 井戸尻遺跡

この遺跡は三峰森、堰ノ上と北東に連なるもので、限戸川を見下ろす丘陵の舌状台地上にある。水田との比高は一〇メートルに及ぶ高さである。ここから発見された住居址も三峰森、堰ノ上と同時期のものである。住居址は二基であるが重複していることが明らかとなった。一号に対し二号が切合っている。

一号住居址が先に建てられたものであることが認められた。主軸が北を示し東西五・二メートル南北四・八メートルの方形の竪穴住居である。北壁に「カマド」が築かれ、火袋部が〇・六メートル、焚口から煙出し部まで一・五メートルである。このカマドの火床が二重になっているのは、後の修理によるもので使用が長期にわたるものである。

二号住居は北西部で一号住居と切合っている。主軸は北を示し北壁にカマドが築かれている。カマドは焚口で一・四メートル、煙出しまでの長さ一・六メートルである。柱穴は一号、二号とも発見されない。須恵器の杯、内黒土師の杯、長襲などが出土している。

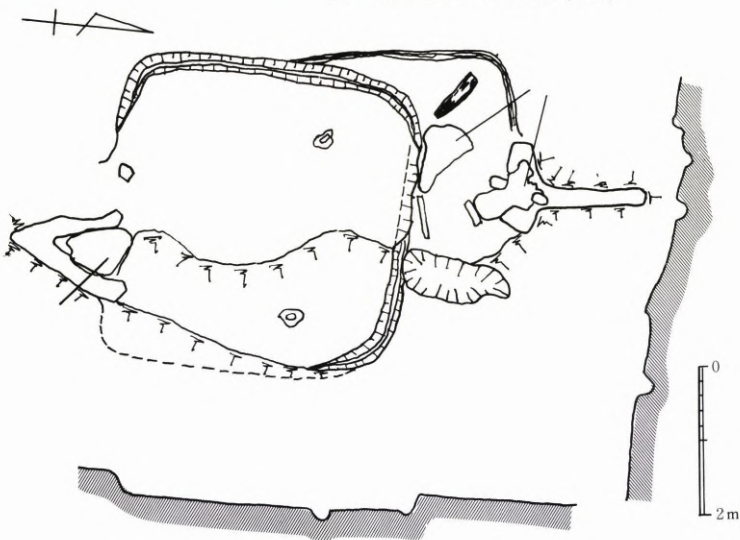
出土品は奈良時代末期から平安初期と考えられる杯、長襲などが発見されている。



(18) 堰ノ上遺跡

町一一〇
全国三〇・三七八

83 1号住居址と2号住居址（手前）



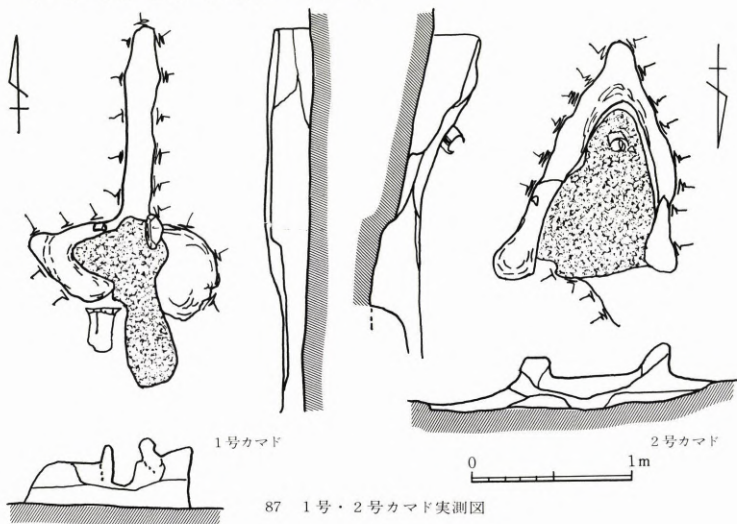
84 1号・2号住居跡実測図



85 1号住居址カマド



86 2号住居址カマド



解説 堰ノ上遺跡

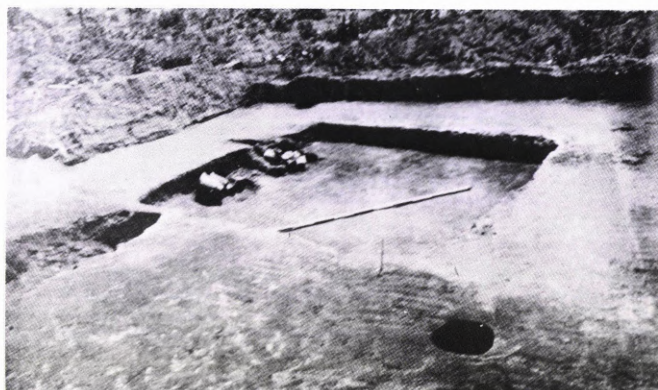
東北自動車道の調査として昭和四十五年五月調査が行なわれた。

さきの三峰森との関係の深い遺跡である。隈戸川に面した館山の中腹にある遺跡である。付近一帯は南東にのびた舌状台地で東に傾斜する陽当りの良い斜面に遺構が発見された。住居址が二基切合って発見されている。古い形式を持つ住居址を一号住居とし、新しい方を二号住居とした。

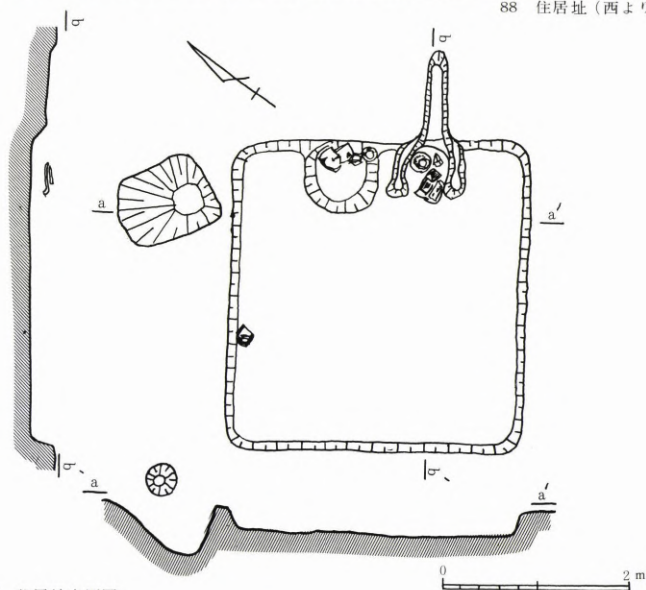
一号住居は残存部が少なく全容は明らかでないが、一辺約四メートルの隅丸方形のプランを持つ竪穴住居と考えられる。北側にカマドが築かれており保存はあまりよくない。床面より炭化木材が出土しているところから、火災により放棄されたものと考えられる。

二号住居址は一号の床面を一段深く掘り込んで床面を形成した、一辺四・五メートルの隅丸方形の竪穴住居址である。周溝は深さ五センチメートルで壁に添って廻らしている。「カマド」は南壁に築かれており幅一・二メートル、全長一・五メートルである。

この遺跡から発見された遺物は、調査中保管倉庫が火災にあい、そのほとんどが焼失してしまったため、その後の調査研究が困難を極めたようである。かろうじて残った資料で研究を進めた。一号住居址、二号住居址ともに対馬式に比定される土師器であるところから、この住居址の構築された時期は奈良時代末期から平安初期にかけての時期と考えられる。



88 住居址 (西より)



89 住居址実測図



90 カマドとビットの出土状況

解説 三峰森遺跡

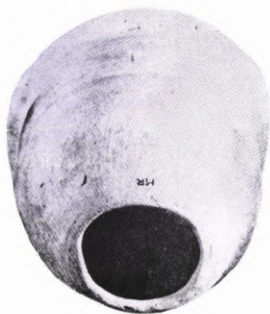
昭和四十五年七月東北自動車道の調査として実施された。隈戸川の河岸段丘上の遺跡である。水田より一〇メートル高地にあり、近くには館山と呼ばれる中世の館がある。遺跡全体に後世の攪乱がみられ、遺構が確認されたものは住居址一基のみであった。一辺三・二メートルの隅丸方形のプランをもつ竪穴住居で壁は三五センチメートルの深さを持っている。床面には柱穴や周溝などは認められていないが、南壁中央部にカマドが検出され煙道もよく保存されている。焚口の状態は良く、火床には長襦が河原石に支えられて設置されていた。

遺物は栗囲式で床面の貯蔵穴内から発見されている。

この近くは開畑工事などにより土器などが発見されることが多いところであり、この辺一带奈良時代の集落があったと考えられる。



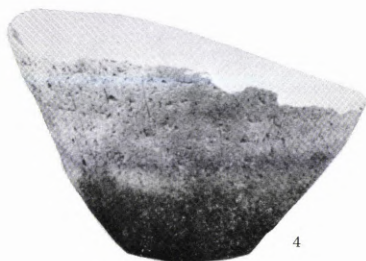
1



2



3



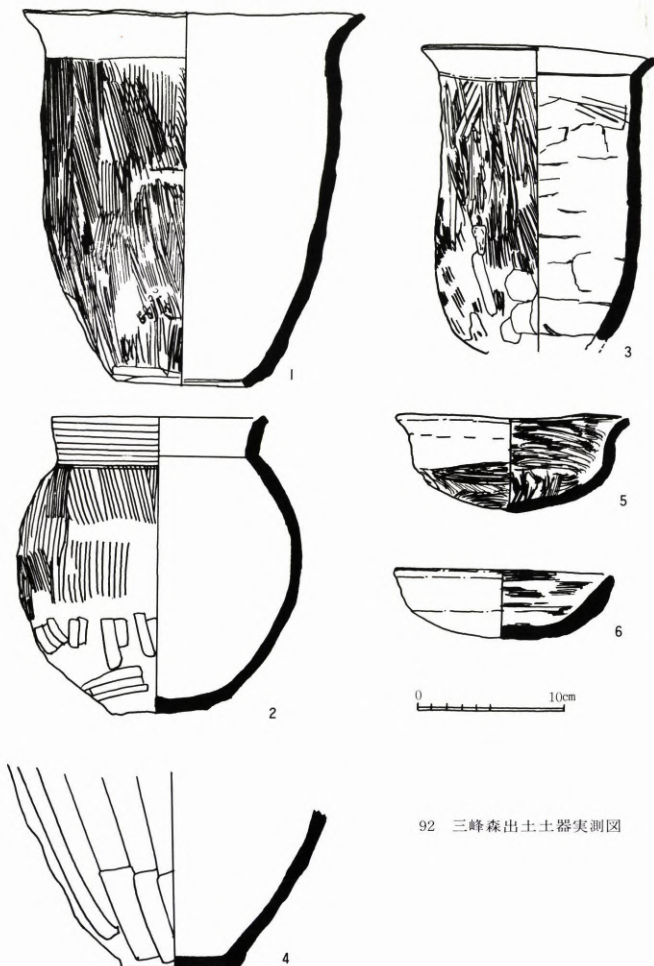
4



5



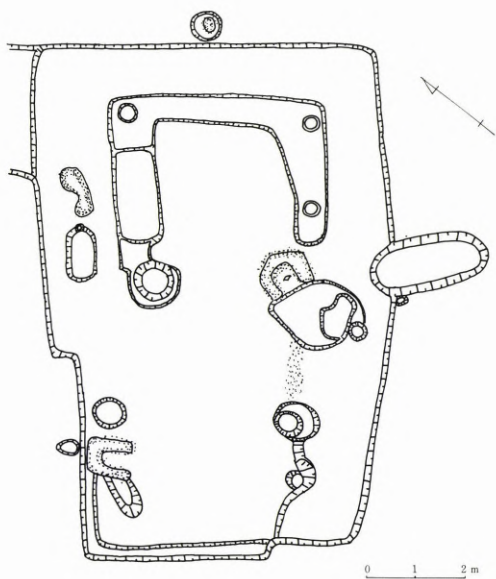
6



92 三峰森出土土器実測図



93 1号住居址



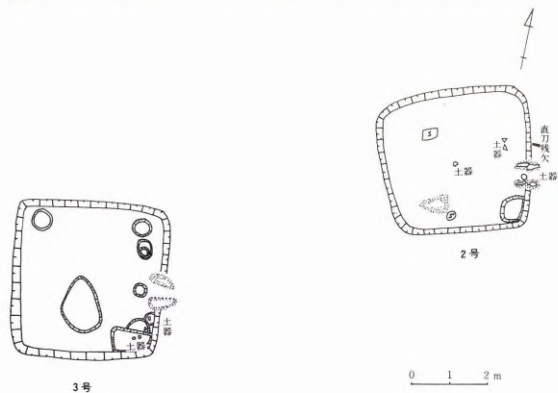
94 森郭遺跡1号住居址実測図



95
鉄製鍋



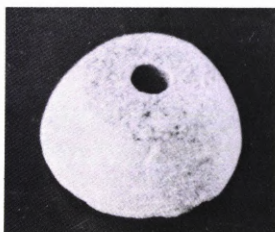
96
3号住居址



97 森郭遺跡2・3号住居址実測図



99 土 器



98 紡 錘 車



100 刀 子

解説 森郭遺跡

中畑字国神にある遺跡である。この遺跡は泉川沿岸の一連の遺跡群中にあるものであるが、中畑地区圃場整備事業のため、事前調査が昭和四十七年十二月二十三日より三十日まで行なわれた。

遺跡は大隅、森郭にまたがるもので、泉川の氾濫原を見下ろす舌状の台地である。

調査は工事期日等の関係から、越冬も年末もおしこまれた二十三日からという、きびしいなかで行なわれた。暖冬のため作業は予定通り進行した。

この遺跡は戦後の開拓による畑地で、その後大形機械の導入により深耕が行なわれているため、土器などの散布状況から遺構は、大分破壊されていることが考えられた。遺物の散布の多い中央部にトレンチを設定し調査を進めた。

中央トレンチに堅穴遺構が発見され、調査を進めるに従って、南北一メートル、東西九メートルの大型のものであることが確認された。この堅穴は南区に七世紀末の四メートル四方の創建時の堅穴に八世紀に入ってから増築されたものである。増築分には北側に入口があり、東、北、南に字形に幅一メートル、五〇センチメートルの溝が検出され、この曲りかどに径四〇センチメートルの柱穴が四本発見された。東側には壁に添ってカマドが検出されたが、遺構は全面には明らかにされなかった。カマドに隣りあつて、幅一・二メートル、長さ二・五メートル、七〇センチメートルのピットが検出された。このピットはカマドに近いところから、貯蔵穴と考えられる。この中からの遺物は少ないが、鍋状の器物が発見された。一号住居からは土器の出土が多く、杯、高杯、かめ、刀子、紡錘車(滑石製)、燈火器に使用された土器などが発見され、この集落の中心に位置している。

二号、三号、四号などの住居址はこの一号住居址を取りかこむような形で配置され、いずれも一辺が三・五×三・五メートルの小形の堅穴住居である。これらの小形の堅穴は一号住居の増築期のもので、八世紀末から九世紀にかけての土師器が発見されている。特に二号住居址から直刀の破片が出土していることは注目されることである。

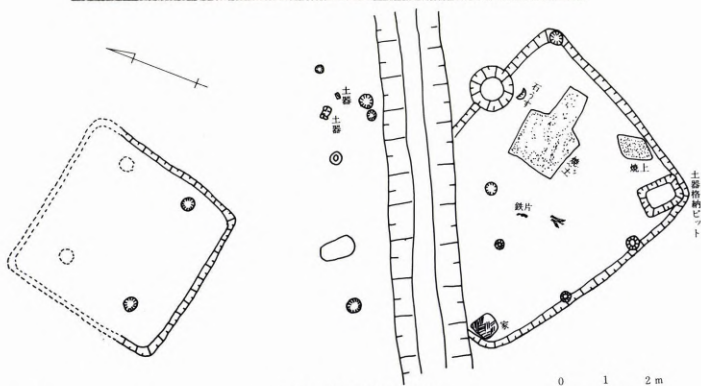
この遺跡は周辺が水田で廻らされた丘陵にあるもので、一種の城郭化しており、古代の「たち」とも考えられる。中畑の岡崎家の古地図にはこの遺跡周辺の図面があり、国神、内屋敷などと関連のあることが明らかである。



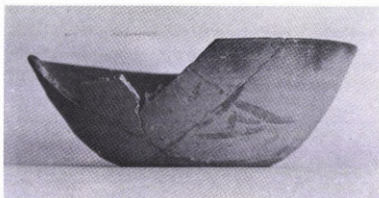
101
工房址



102
工房址ピット



103 寺山遺跡実測図



104 土器（墨書）



106
土
器



105
土
器

解説 寺山遺跡

松倉部落から北に発達した丘陵の南と東の斜面で泉川の河岸段丘に及んでいる。調査は昭和四十六年一月に行なわれたもので矢吹地区圃場整備事業に伴なうものである。調査が行なわれたのは南斜の遺跡で四メートル四方のプランを持っており、柱穴四本と考えられる堅穴住居である。「カマド」は北壁にあると考えられるが明らかにされなかった。住居内からは杯、長がめなど土師器が多く発見された。

この南側一段底地に五メートル（南北）、六メートル（東西）のでローム層を一五センチメートル掘込んだ堅穴遺構である。柱穴は壁に接して掘られており必ずしも等間隔でない。この遺構は調査による遺物から鍛冶遺構と考えられた。中央東寄りに幅一・五メートル、長さ二メートルの凸字状の焼けた遺構があり、これは鍛冶の火床と考えられるもので、ここから輪の羽口が発見された。この北側壁を切り込んで径一メートル、深さ四五センチメートルの円形ピットがあり、この中に砂鉄と考えられる黒砂状土が混入していた。また特筆すべき発見としてこのピットの近くに半分に割れた石臼が出土したことが上られる。この遺構の存在した年代は九世紀と考えられることから、この発見は貴重である。この工房で使用された木炭は西南隅に格納されていたようである。また東南隅に一メートル×六メートルの方形ピットがあり、この中に約三〇点の杯が格納されており、精査の結果一四点の墨書銘を含む内黒土器の杯であることなどが検出された。この鍛冶遺構の北部三分の一は後世の溝により破壊されている。前述の住居址はこの工房の工人の住居と考えられる。

墨書土器について

これらの土師器は内黒処理の杯である。手法は九世紀にみられる、回転ヘラ削りを施し底部にヘラ調整を行なっているものと、回転糸切りの切りはなしのものとが同時に出土している。

「人上」「二点」「回転ヘラ削り底部ヘラ調整」「利万」四点——これも前記と同じ手法による。「千万」「三点」——これも上記と同じ手法によるものである。「千万」「二点」——この二点は底部が回転糸切りによる手法によっている。解説不明のもの三点である。これらはいずれも古代の人名と考えられるものである。



107 4号(左)、3号(右)住居址

108 1号住居址

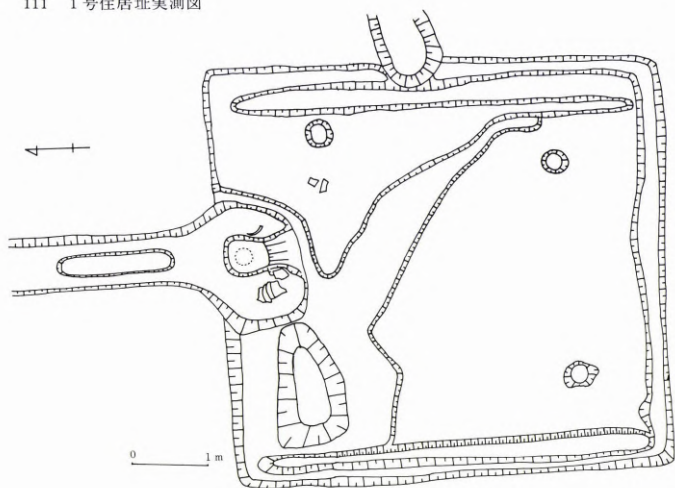


110 1号住居かまど

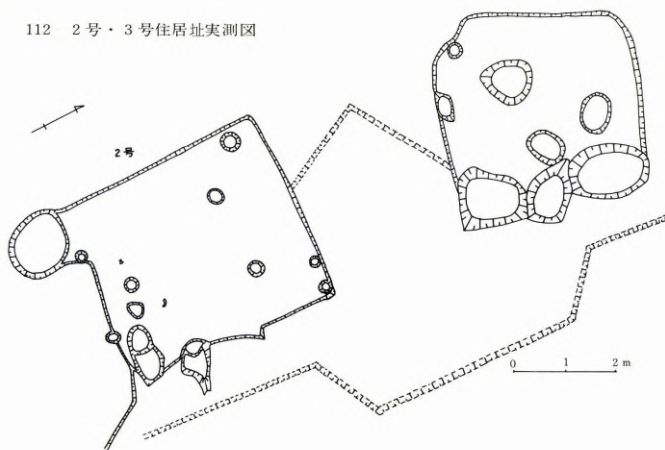


109 2号住居址

111 1号住居址实测图



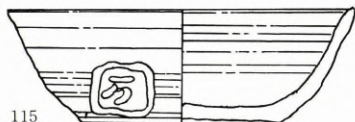
112 2号・3号住居址实测图





113

土器「王」の墨書銘



115



116



117

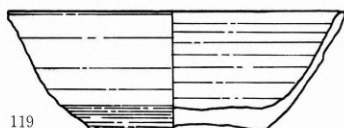


118



114

土器蓋黒色



119

115 ~ 119 土器実測図



須恵器長くび壺
4号住居跡出土



0 5 cm

解説 下荒具B-2遺跡

住居址

一号住居址 表土より一・二メートルに床面があり、六メートル四方の竪穴住居である。この住居の竈は創建時には東向に設置されたものであるが、のち北側に移築されたものである。煙道は二・五メートルの長さであることが確認された。なお焚口の構造は両袖に長装をさかさに立て、灰と粘土を混合して築いたものである。

遺物は内黒土師が主で、杯には「国」「四」の墨書とヘラ書きがあった。これらの土器はいずれもロクロ土師器で九世紀後半に位置付けられるものである。

二号住居址・三号住居址

この二基の住居址は製鉄遺構の竪穴の床を切って構築しているものである。いずれも四メートル四方の竪穴である。二号は火災にあったと考えられるもので、遺跡の保存も良くはなく、耕作による破壊もはなはだしい。

遺物は須恵器及び土師器が多く、一号住居と同時期と考えられるロクロ土師器が発見された。

三号住居址は製鉄遺構の南側の床を切って構築されており、遺構の保存状況は良い。四本の柱穴も四〇センチメートル前後である。竈は東に構築されていた。

発見された遺物は須恵器及び土師器が多く、「王」の墨書銘をもつ内黒土師をはじめ、高さ八センチメートルの長頸壺などでロクロ土師器の時期である。



121 全 景



122 「王」「申」の墨書銘のある土器

解説 太子堂遺跡

太子堂遺跡は寺山遺跡の北方五〇〇メートルにあり泉川の河岸段丘に続く丘陵地帯である。圃場整備工事が行なわれた畑から土器が発見され注目されたが、遺跡は破壊されてしまった。そこから発見された完形の内黒処理が行なわれた杯に「王・申」の墨書があった。「王」は体部に書かれ「申」は底部に書かれているため、どのような意味を持つものか明らかでない。

土器の製作手法は体部下半に回転斫削りのほどこされ底部は削りおこしのうえ調整を行なったものである。

矢吹町の生いたちを示す資料として、考古資料が重要な役割を占めることは申すまでもないことである。

矢吹町は地形的にその東部は、阿武隈川の沿岸であり、旧石器から縄文、弥生、古墳、古代と数多くの遺跡が存在する。この遺跡を調査し研究することによって、日本民族の歴史の発展史上、矢吹の置かれた位置を知ることが出来る。

くわしいことは通史に譲ることとして、今まで発見された資料について簡単に述べてみると、今から約三万年前阿武隈川の沿岸三神地区の陣ヶ岡に、旧石器時代の人々が生活していたことを示す石器が発見されている。この頃から我々の先祖は矢吹地方に住んでいたようである。約八千年ほど前の遺物として中畑の泉川に面した下荒具をはじめ数ヶ所の遺跡から縄文早期の土器が発見されている。これに続いて縄文前期には松房池（中畑）、渡池遺跡（中畑）、赤沢山遺跡（大和久）がある。中期に入ると越中山遺跡が泉川の南の丘陵に栄えた。この時期のものとして向原（中畑）をあげることができる。後期から晩期にかけて柏山（中畑）、赤沢（大和久）に遺跡がある。この時期になると、丘陵上のみ生活したのではなく、沖積平野にも進出して、次の弥生時代への移行と深い関連をもつようになってくる。

弥生時代は米作文化の導入によって、今日の文化の先駆をなすものである。北九州には紀元前三世紀から栄えるが東北地方に影響を及ぼすのは遅く、中期（紀元前百年）と考えられている。赤沢（大和久）、愛宕下（中畑）、赤淵（中畑）、赤淵

（三城目）などに弥生文化が定着し、低湿地帯を開墾して穀をまいて生産をする新しい時をむかえたのである。

米作を中心とする文化は、富の蓄積により、豪族の発生を促した。四世紀になると遺跡から発見される土器も無文のものが多く全国的に斉一性の強い土師器がつくられた。また鉄器の普及と農業技術の向上によって、地方に発生した豪族は、その勢力を誇示するためか、墓は大きな高塚の古墳がつくられた。これらの古墳には中期になると、埴輪をめぐらしたものが出るようになり、地方の古墳文化の最盛期をむかえるのである。鬼穴古墳（神田）、谷中一号墳（三城目）は大型の横穴式石室をもち四〇メートルに及ぶ墳丘をもつものである。この時代は白川国造が勢力を持ち矢吹地方を支配した時代であり、この国造と関係のある豪族が神田、三城目地区に本拠をおいていたことが考えられる。七世紀まで古墳時代は続き、中央政府の支配による律令時代へと移行してゆくのである。

律令時代に入ると矢吹地方は白川郡に属し、松戸郷に推定される。また東山道の通過地で古代の集落とされている土師器の多く出土する遺跡が多い。さて白川郡の郡衙のあった関和久から五キロメートルと近く、古代白川郡の中心部に位置していたことが考えられる。中畑のかに沢から発見された瓦窯址は布目瓦を焼いた生産遺跡である。ここから出土した平瓦に「寺」のへら書のあるものであるところから、白河市借宿廃寺に使用された瓦の窯址として注目され時期も奈良時代前期と考えられている。中畑地区は生産遺跡が多く、このかに沢窯址に伴なう住居址には銅を精練したと考えられる炉の破片、鉾澤、銅塊などが発見されている。また下荒具Bからは製鉄遺構が発見され、

引用文献

寺山遺跡は大規模な製鉄遺構と、これを加工した小鍛冶遺構があり、これらの遺跡からは多数の墨書土器が発見されている。これらの資料から考えて、松倉、中畑の泉川沿岸地帯には律令時代の大集落があり、高度な生産活動が行われていた。これらの遺跡群は関和久に置かれた白川郡衙の重要な工業地帯として、高度な技術をもった工人の集団であり、墨書土器の発見から、文化的にも高い水準にあったことが明らかである。この時代の矢吹地方は、東北地方開発の拠点として中央の強い影響下にあったものと考えられる。

(永山倉造)

『谷中古墳』 矢吹町文化財調査報告書 昭和46・矢吹町教育委員会

『東北自動車道遺跡調査報告』 福島県文化財調査報告書第47集 昭和50・福島県教育委員会

日本道路公団

『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査概報2』 福島財調査報告書第31集 昭和46・福島県教育委員会

日本道路公団

『目でみる矢吹町史』 昭和50・矢吹町

